

平成30年2月1日(木)

老球の細道389号

1月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「始め良ければ終わり良し」をスローガンに、目標、年賀状などを早々に終了させて、昨年よりさらに健康で楽しい毎日を過ごせることを希望してスタートした。途中でバスケット関係の恩人2名の逝去があり、改めて人生の無常さを思い知らされた月だった。

1・読書から

◆「“あきらめない”とは結果が見えない中で努力を続けること」〈三上太著『高校バスケットは頭脳が9割』東邦出版〉

ウインターカップ出場常連校の名将たちから聞いた話をまとめた本である。常連校の強さは、ただ単に優秀な選手をリクルートするだけではなく、謙虚に努力することも教育することを忘れない。なかなか勝てないチームは、結果が見えてくるとすぐにあきらめる、相手がちょっと強い相手だと戦う前からあきらめることを常とする。

◆「競技スポーツは喪失と獲得、競争と共同、共存と敵対、苦悩と幸福、勝利と敗北、屈辱と向上、傲慢と失脚といった人生で経験すべきことを集約的に経験できる宝庫」〈『コーチングクリニック』ベースボールマガジン〉

バスケットボールで人生のことはだいたい学べる。ただし、そこには「コーチ」という善きパートナーが必要だ。あるミニバスの保護者が言っていた「バスケットボールに子どもが人生がかかっている。どのような指導者に習うべきか?」と。

◆「花とどう向き合うかということです。作品に対する敬意がなければ、いい作品は生まれません」〈『スポーツジャパン・華道家元に聞く』日本体育協会〉

ある有名な華道家元の言葉である。花に向き合うことにさえリスペクトを忘れないという。いわんや、人間に向き合うコーチはどれほどのリスペクトが必要か。

2・新聞のコラム等から

◆「テーマをつかむのに、私には63年という時間が必要だった。小説の神様は待っていてくれた。何かを始めるのに遅いということはない。実感です」〈朝日・ひと・若竹千佐子〉今年芥川賞を受賞した作家の言葉である。55歳の時に夫を亡くし、長男のすすめで小説講座に通いながら63歳で書いた『おらおらでひとりいぐも』が受賞。何ごとも“今からでも遅くはない”。やり残したことはきちんと落とし前をつけてからさよならしよう。

◆「全力で恥をかけ」〈朝日・『私の折々のことばコンテスト』から〉

成功は失敗から生まれる。失敗は恥をかくが、大いなるチャレンジをしなければ経験できない。恥を恐れる人はチャレンジしない。

◆「日に新たに。ことしは去年のままであってはならないということ、きょうは昨日のままであってはならないということ、そして明日はきょうのままであってはならないということである。万物は日に新たに。人の営みもまた、天地とともに日に新たにでなければならぬ」〈朝日・パナソニック広告文・松下幸之助より〉

新年を迎えるのに最適の言葉であった。経営の神様とリスペクトされた故松下幸之助氏の言葉であるが、語源は中国の四書五経の『大学』。名君と賞賛された古代中国殷の湯王は日に三度「日に新たなり・・・」の言葉を唱え、気持ちを引き締めたという。